



NPO 法人 京都観光文化を考える会

都草だより

第91号
発行人：小松香織
編集人：相場まり子
発行所：京都市上京区
下立売通新町西入
京都府庁旧本館2階
電話：075-451-8146

■ 観芸祭、尺八の音色を楽しむ会を終了して



10月25日（土）から11月3日（月・祝）まで府庁にて観芸祭が催されました。その催しに私が所属する都山流尺八楽会京都支部に参加の機会をいただき、26日（日）午前10時30分から旧議場にて演奏することになりました。演奏の依頼を受けてからハラハラドキドキの日々が続きました。演奏会に何人出演してもらえるか、当日の天気は大丈夫か、お客様がどれくらい来てもらえるのか、…。心配の種はつきませんでした。



当日は朝から雨模様で開始する時は曇天になりましたが、お客様は予想どおりで少なかったです。しかしながら来られた方々が熱心に鑑賞する姿が見えたのが我々にとって何よりも喜ばしいことでした。海外からのお客さまも見えたのも意外でした。我々演奏者は8人で現支部長の指揮で先代の支部長、現地区長（女性）の独奏を含んだ合奏曲ばかり4曲を準備、事前に練習会を設けて当日を迎えるました。全員が紋付袴の盛装、みなさんは驚かれたみたいです。

私は司会進行と演奏を担当していて演奏をしながら次に何を話そうかと考えながら、ところどころ出遅れたり、逆に先に走ってしまったりで、演奏会を終えてから顔が赤くなる思いをいたしました。旧議場は演奏者にとっては、一度はやってみたいところで、実際に吹いてみて音響も雰囲気も最適なところとの出演者一同の声でした。重要文化財と知ってよけいに気分も盛り上がったみたいでした。関係者の皆様全員に感謝です。（会員 奥西 不二）

■ 第43回文化交流部会「禪華院で写仏写経体験と平八茶屋で昼食」



11月7日（金）、修学院離宮の南西にある禪華院（ぜんげいん）で24名が参加し、写仏写経体験が行われました。山門の鐘楼門を潜ると、石仏群が温かく迎えてくださいました。隅田恵信住職から掌にお浄め香が置かれると、写仏に臨む心構えが整うようでした。お寺の縁起、ご本尊、寺宝などについてのお話の後に、いよいよ写仏に挑戦です。「三面大黒天像」か「白衣観音像」のどちらかの下絵を各自が選び、下絵の線の上を筆ペンで描きます。小堀遠州作と伝わるお庭を前に、一時間ほど黙々と筆ペンを走らせましたが、太い線

や細い線を描き分けるのは思った以上に難しく、特に顔のラインや目を描くときには緊張しました。完成後は仏様にお供えし、朗々と響く良いお声のご住職と一緒に般若心経を唱えさせていただきました。

集中したせいかお腹が空いたところで、20分ほど歩いて川端通りに面して建つ「山ばな平八茶屋」へ移動。趣のあるお店の2階で「麦飯とろろ膳」をいただきました。名物のつくね芋を使った「麦飯とろろ汁」は、440年もの間、京都と日本海を結ぶ若狭街道（鯖街道）を往来する旅人を魅了してきただけあって、濃厚で豊かな味わいでした。満腹になり、写仏の後の疲れも吹き飛びました。高野川のせせらぎと色づき始めたモミジに身も心も癒されて大満足の一日でした。（会員 松村 千恵子）



■ 「京都駅は石の博物館」（旧議場土曜講座）



10月18日（土）、京都府庁旧本館で行われた旧議場土曜講座で、「京都駅は石の博物館」と題してお話しいたしました。京都駅の石のお話は、2023年2月2日（木）の第125回研究発表会でも取り上げ、2024年8月号の月間京都にも掲載されました。

1997年、4代目として開業したJR京都駅は、中央口の柱6本に世界35か国288種類の銘石、石材のサンプルが展示しております。なかにはドイツの「ジュライエロー石灰岩」のように3億年前、ジュラ紀の大きなアンモナイトを見ることができるサンプルもあります。

実際に京都駅に使用されている石材はすべて世界の銘石と称されるもので、外側には風化に強い花崗岩（御影石）、内装は美しい大理石が使われています。

御影石は、赤が美しいインド産の「ニューインペリアルレッド」「ジムルビーレッド」、中の石がブルーに光る南アフリカ産の「ベルデフォンテン」、インド産の「サファイアブラウン」です。内装の大理石は、ホテルグランヴィア京都に赤の美しいインド産の「マルチカラーレッド」、フランス産「ランゲドック」、大きな模様が美しいフィンランド産の「バルチックブラウン」と「バルチックグリーン」、伊勢丹付近にはフィレンツェのミケランジェロ作「ダビデ像」使用のイタリア産で美しい白の銘石「ビヤンコカラーラ大理石」などです。また大階段3階には緑が美しい「台湾蛇紋岩」など見るだけで楽しい銘石がふんだんに使われています。近鉄京都駅の1階の柱には大きな宝石質のガーネットが輝くブラジル産の「サモア花崗岩」も必見です。

いつも通り過ぎる駅、今度銘石を見ながら散策されてはどうでしょう。（会員 高木 哲）

■ 第2回映画研究会イベント「東映京都撮影所を散策」



9月28日（日）、日本のハリウッド京都太秦、『国宝』など昨年来、邦画のヒットで話題を呼ぶ日本最大の撮影所である東映京都撮影所を見学する機会を得て、参加者全員興味津々わくわく感で臨みました。ご案内は東映の俳優吉野智貴さん。映画村ゾーンから所内に大きく『警笛ならすな』と書かれた通常非公開の撮影所に一歩進むと空気感が一変。まずは大道具・小道具の収蔵倉庫を見学しました。時代劇などのセットの建物部材や張りぼて軽量の岩石などが所狭しと収蔵され、歴史的な作品の背景を担った部材が次回の出番を待っている様子がわかりました。第7スタジオに移り、お白洲が出来そうなセットを拝見。第8スタジオでは建物が屋敷の大広間になったり、間仕切りやふすま障子を替えることで様々な場面対応ができる様子がわかりました。天井がないことも「なるほど」と納得。このスタジオでは次回作の情報もいただきました。真夏に冬のシーン撮影、またその逆など、季節とリンクしない苦労がつきないこと。

最後に俳優さんが待機される俳優会館の説明をうかがい、スターさん、大部屋さんによりフロアが異なることや、上の階に剣劇用の道場があり稽古に励まれていることなど貴重なお話を楽しく拝聴して終了。メークアップやカツラのつけ方が最近はリアルになってきたことや大部屋さんは基本自分でメークやカツラ着用を行うことなど裏話も聞けてとても貴重な機会でした。今後も制作過程に思いを馳せながら積極的に映画を観て行こうと思います。

（会員 野津 隆）